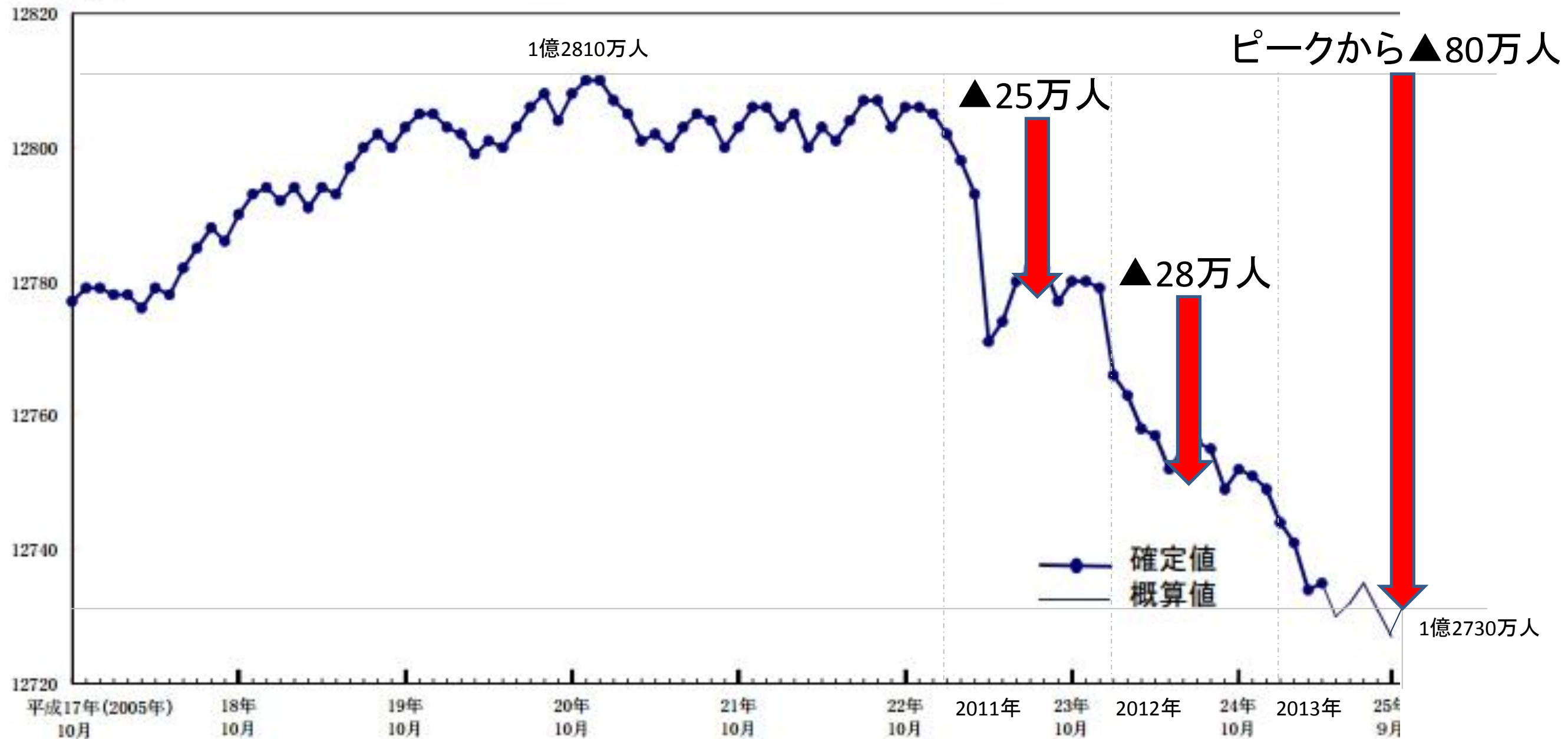


星の民。

かつて誰も
経験したことがない
人口激減社会が
はじまっている。

311以降、3年弱で▲75万人の減少。(総人口)

(万人)



年月	平成24年(2012年)				平成25年									
	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
総人口(千人)	127,487	127,515	127,512	127,492	127,445	127,412	127,337	127,354	P 127,300	P 127,320	P 127,350	P 127,310	P 127,270	1億2730万人
前年同月比(%)	-0.22	-0.22	-0.23	-0.23	-0.17	-0.17	-0.19	-0.17	P -0.18	P -0.17	P -0.17	P -0.19	P -0.17	▲0.17%

P: 概算値

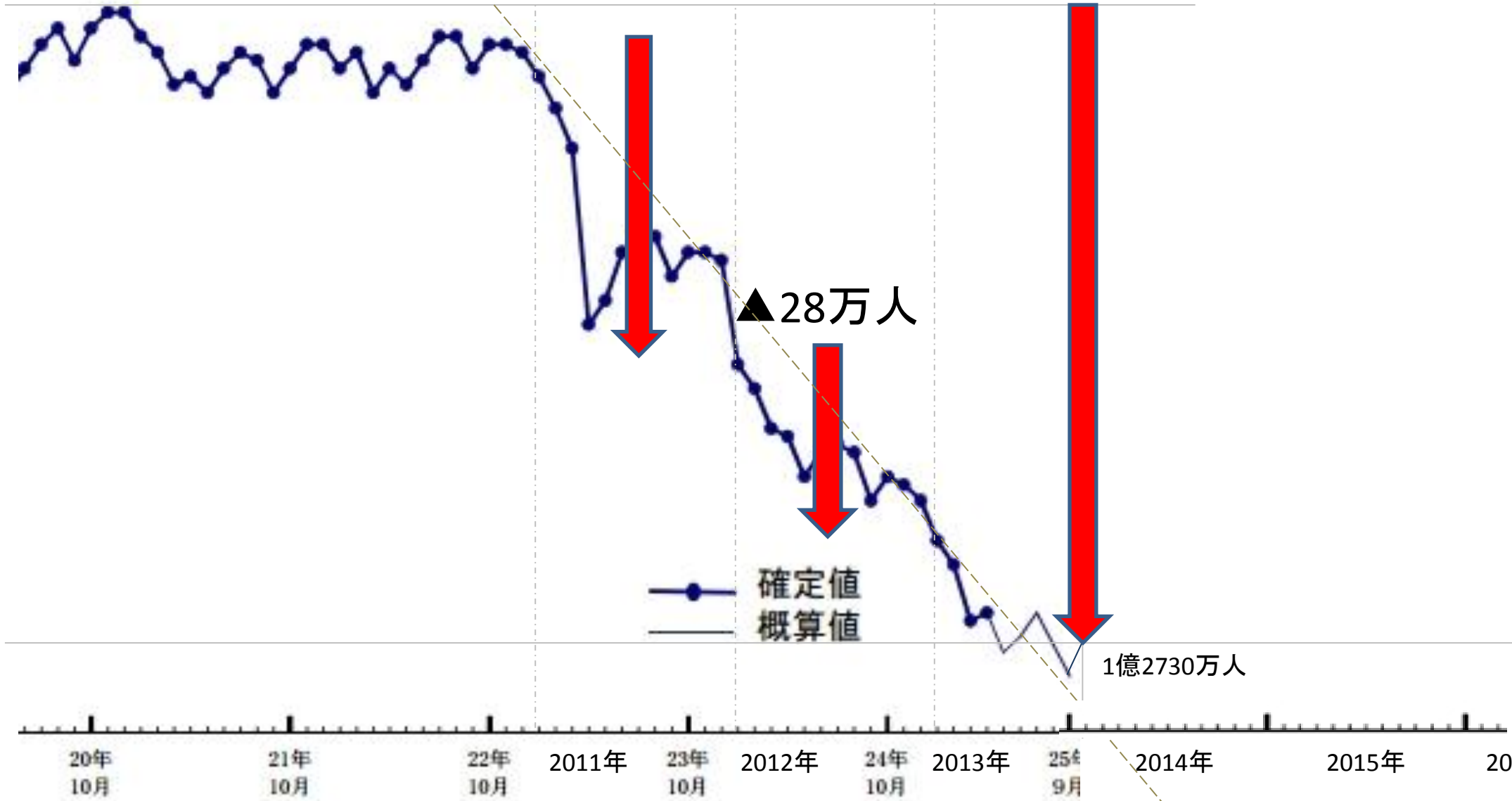
このペースで
人口が激減
していく。

予想①。(減少率正比例の場合) 3年後▲80万人の減少。

1億2810万人

▲25万人

ピークから▲80万人

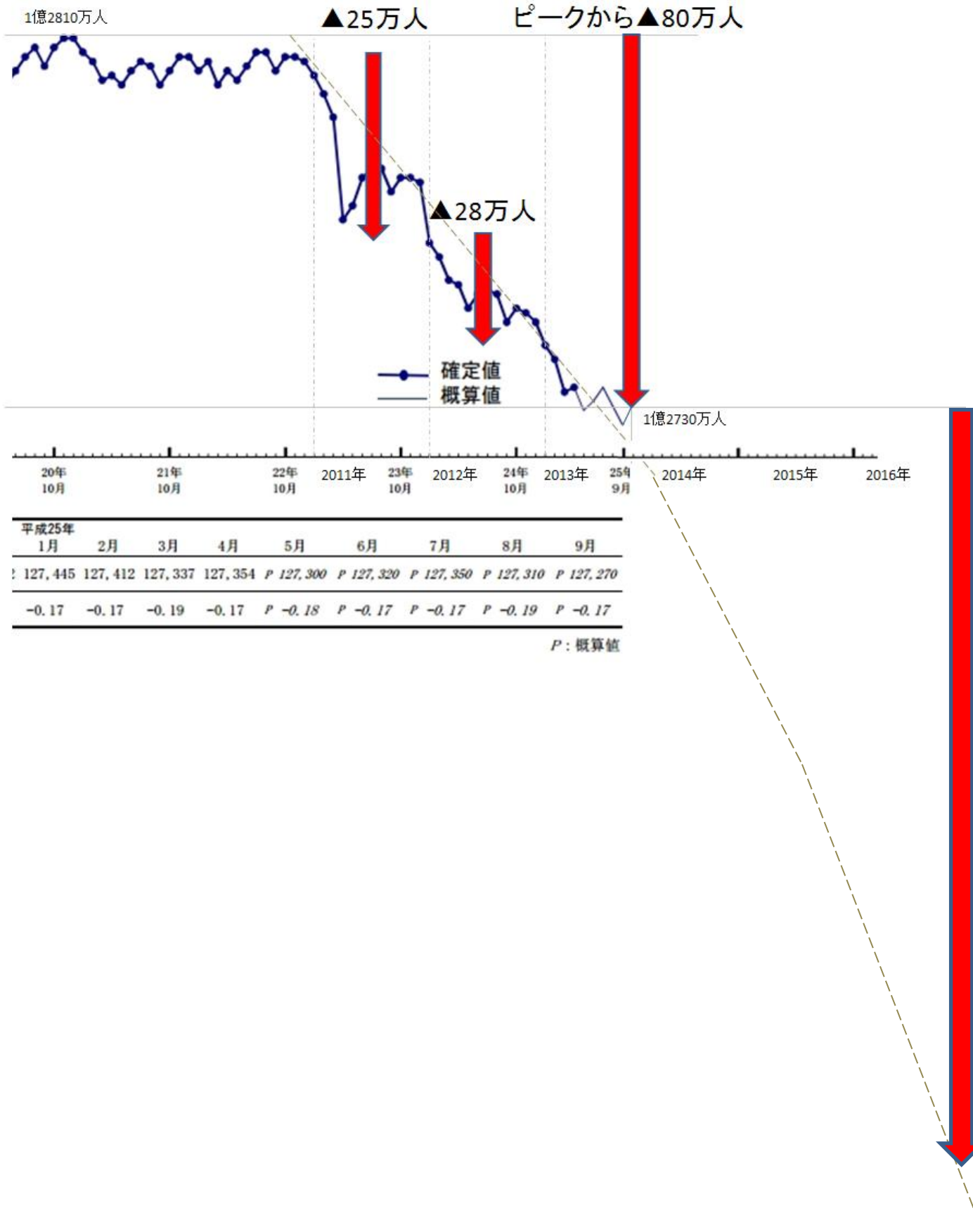


正比例で3年後
▲80万人

平成25年									
1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月
127,445	127,412	127,337	127,354	P 127,300	P 127,320	P 127,350	P 127,310	P 127,270	1億2730万人
-0.17	-0.17	-0.19	-0.17	P -0.18	P -0.17	P -0.17	P -0.19	P -0.17	▲0.17%

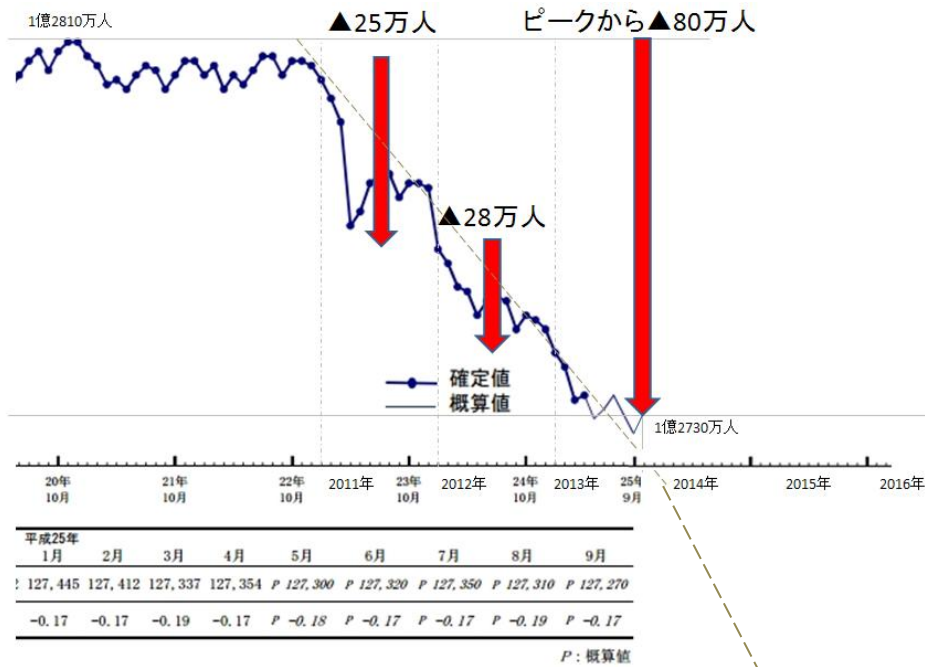
P: 概算値

予想②。(被曝5年後から死者増加の場合) 3年後▲160万人の減少。



3年後
▲160万人

予想③。(被曝5年後から死者3倍増加の場合) 3年後▲240万人の減少。



3年後
▲240万人

WELCOME!!

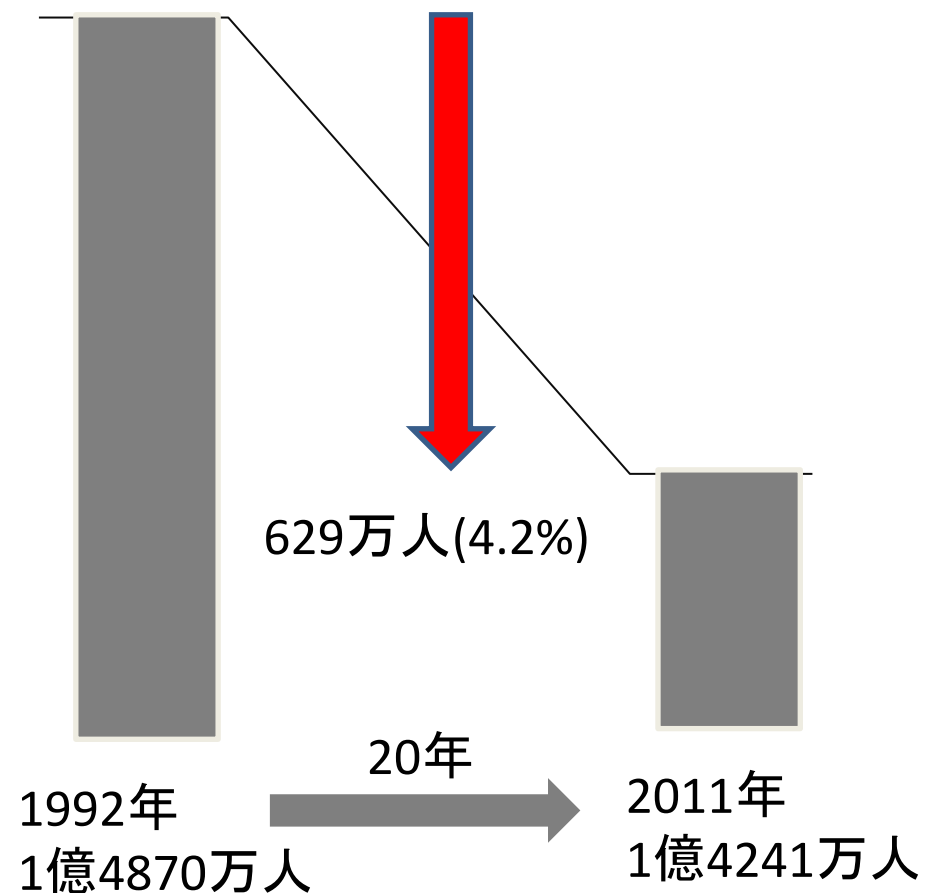


TOKYO 2020

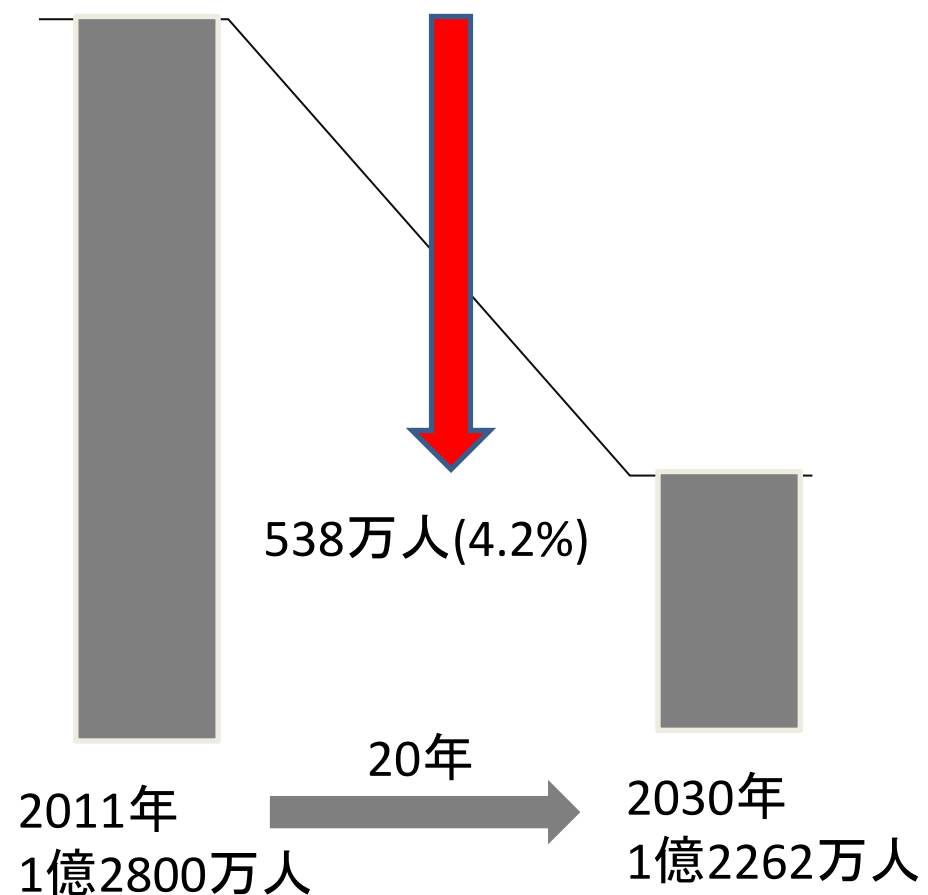
RADIOACTIVITY CITY

ソ連の
人口減少率を
日本に
あてはめてみる。

ロシアの人口



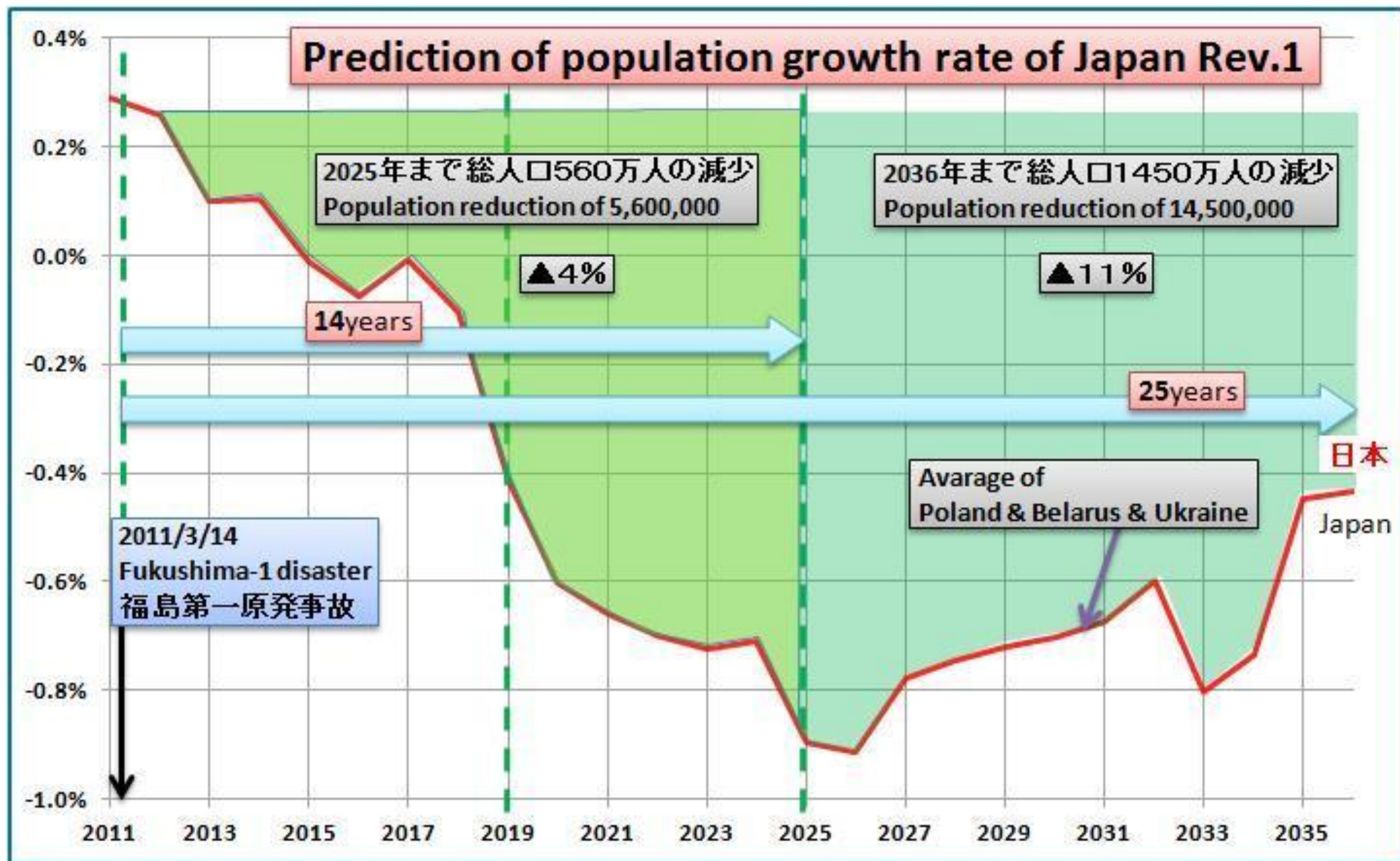
日本の人口



2030年
までに
538万人
減少。

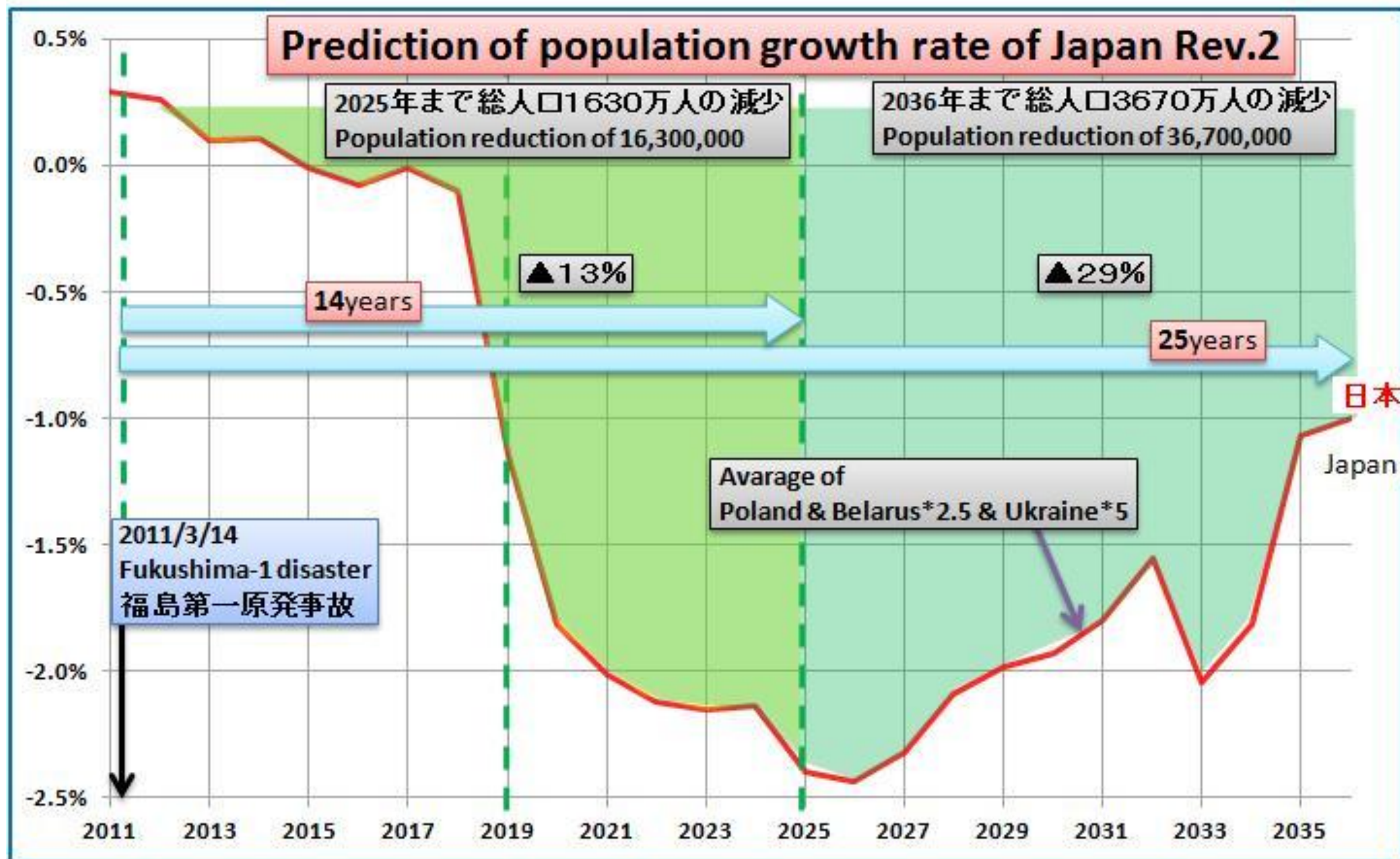
**BOPPO氏の
予想を
みてみる。**

2025年までに560万人減少。



これは楽観バージョンというが、ほぼ、おなじ減少である。

2025年までに1630万人減少。



悲観バージョン。

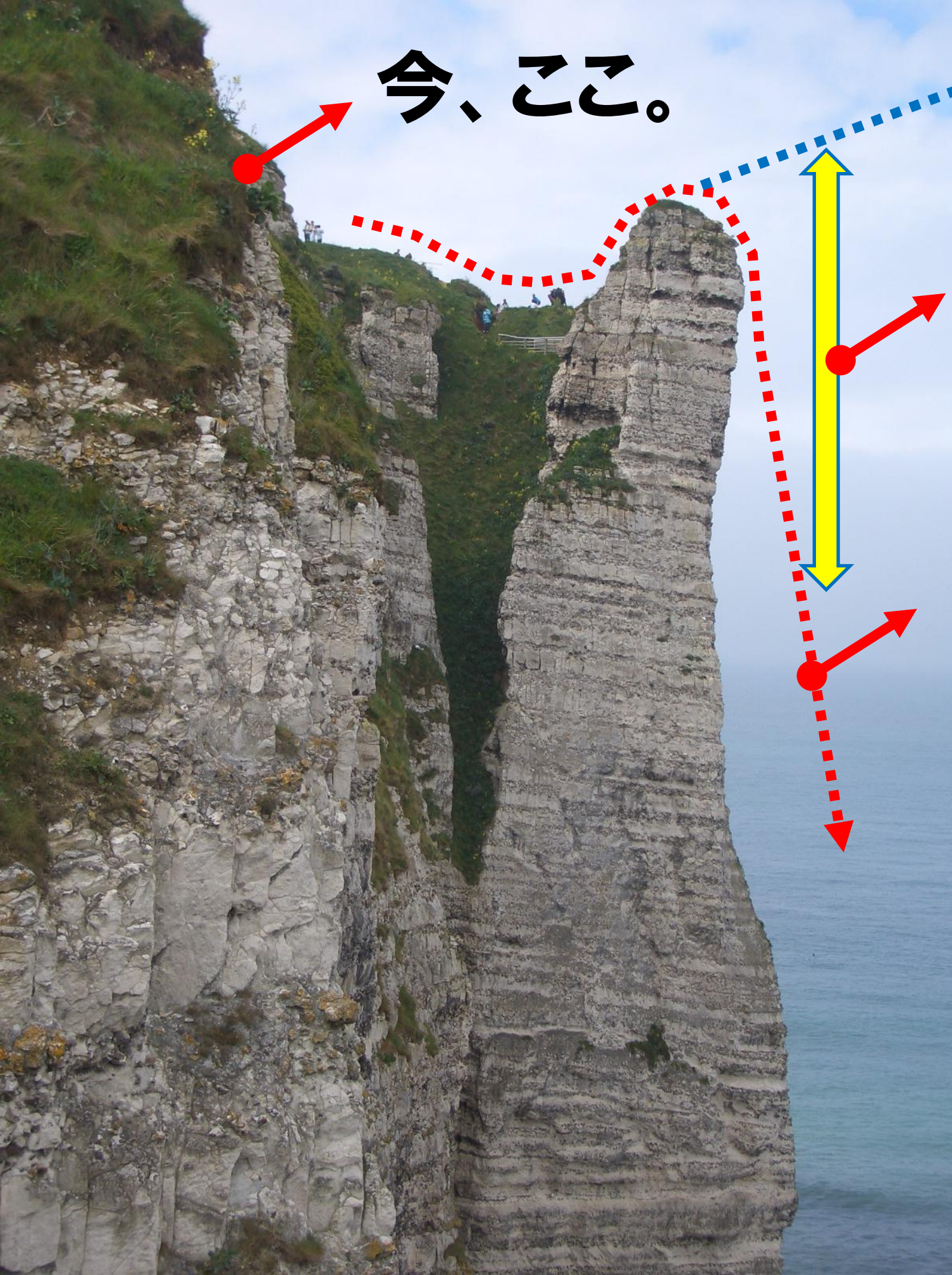
日本の場合、放出線種・線量と、定住政策・拡散政策からみて、これでも甘いと思う。

人口減少＝税収減少。

人口減少＝消費減少。

人口減少＝マイナス成長。

ゆえに、日銀は資金供給政策を止めることができない！。



今、ここ。

「成長」という幻

**日銀の国債引受け＝
国民からの借金の
無制限の引き出し**

現実にかかること

**我々は人口増大社会の
幻影である
「成長」という幻を
追い求めている。**

なぜ、成長しなければならないのか？

豊かな消費生活の幸福幻想を刷り込まれて
成長の奴隷として生きてきた。
その結果、高濃度汚染地帯で暮らさざるをえない。
そしてまた、財政の崖っぷちにいる。
しかし、成長なんかいらない。
ただ四季の自然の恵みに感謝して、
周囲の人々の支えに感謝して、
穏やかに暮らせたなら、いちばんなのではないか？



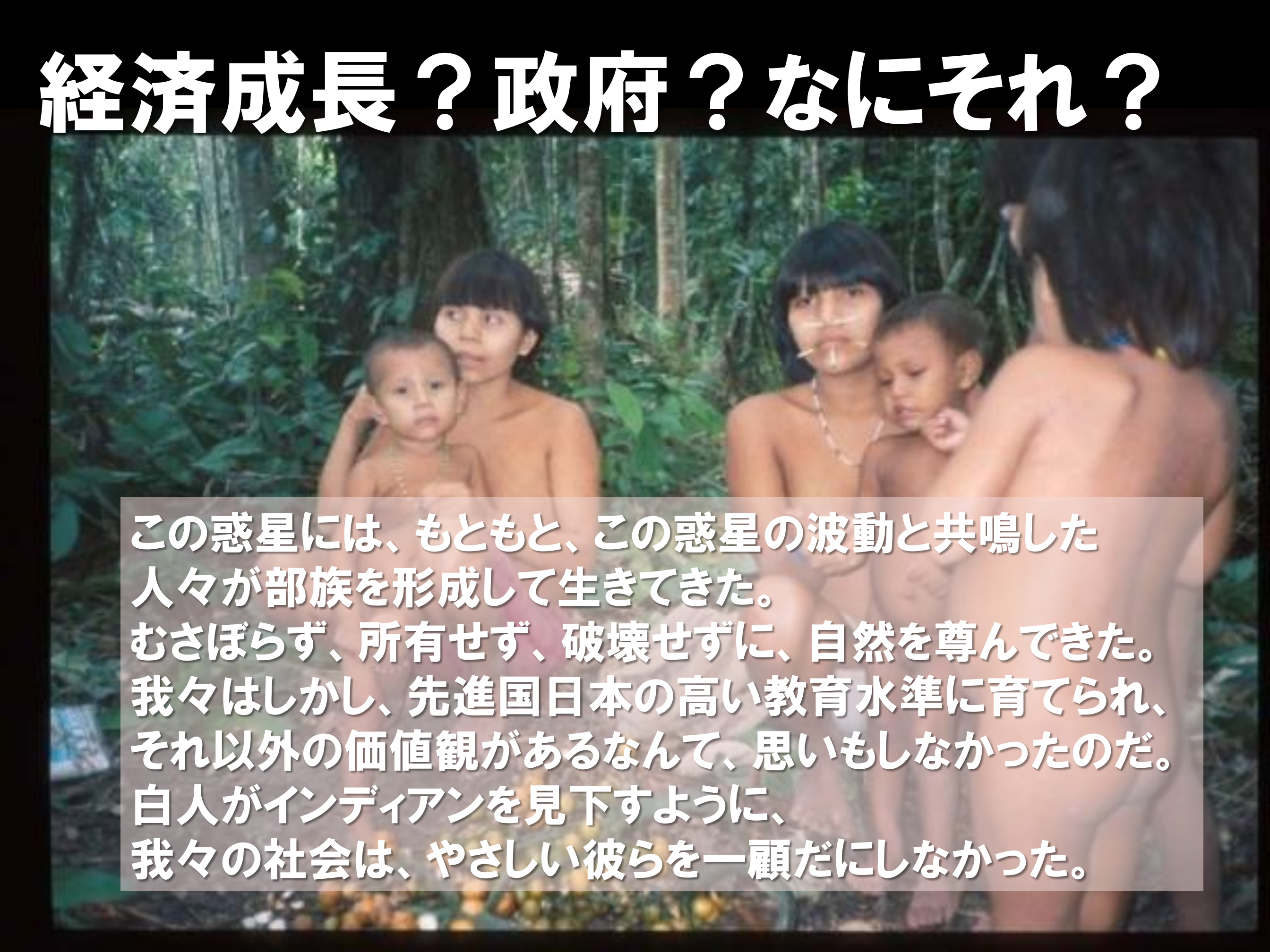
競争、優位化、特別、という価値観。

よりエキサイティングなものを求める。
刺激を求め、特別なものを求め、優位に立つことを求める。
豊かさを求め、便利さを求め、快適さを求める。
我々の原動力となっている「欲望」。
その欲望を支えていたものが、石油・電気エネルギー。
いま、我々は311前と同じようにスポーツに酔いしれ、
消費生活に溺れている。

何かが、終わった……。

あの日、我々の社会を支えていた「何か」が崩壊した。
たしかに、崩壊した。
しかし、それは人々の目から隔離され、隠された。
多くの人々が公式には「地震で死んだ」とされた。
しかし静かに、突然死が増えている。
我々は、地球という惑星に巣くう「何か」の終わりに、
立ち合っているのだろうか。

経済成長？政府？なにそれ？

A photograph of indigenous people in a forest. In the foreground, a woman is seen from the back, her back to the camera. In the middle ground, two women are holding infants. The woman on the left is looking towards the camera, while the woman on the right is looking down at the child she is holding. The background is a dense, green forest. A semi-transparent text box is overlaid on the bottom half of the image.

この惑星には、もともと、この惑星の波動と共鳴した人々が部族を形成して生きてきた。むさぼらず、所有せず、破壊せずに、自然を尊んできた。我々はしかし、先進国日本の高い教育水準に育てられ、それ以外の価値観があるなんて、思いもしなかったのだ。白人がインディアンを見下すように、我々の社会は、やさしい彼らを一顧だにしなかった。

金属もプラスチックも石油もない

ちょっと、ちょっと、ほんとうにテクノロジーって、この惑星と我々と生きものたちのために、なっているんだろうか？



家族の時間だけが、ある。


ちょっと、ちょっと、日曜日にショッピングモールに行くだけの家族じゃないだろうか？ 収穫、調理、生産、いろんなくらしを一緒にやったことなんてあるだろうか？

なぜ学校へ行くの。

ちょっと、ちょっと、学校で兵隊の行進を学んで、なんになるうっていうの？なぜ、テーマパークのほうが楽しいの？なぜモバゲーするの？

ブランド？知らない。

流行なんて知らない。ファッションマガジンもない。

A young woman with long dark hair is wearing a crown of blue flowers. She has her hands clasped together near her mouth and is looking upwards and to the right with a thoughtful expression. The background is blurred with warm, bokeh lights.

未来に悩むこともない。

就職もない。失業もない。社会保障もいらない。生命保険もいらない。

A group of men in traditional attire, including large feathered headdresses and armbands, are performing a ritual. They have their fists raised in a gesture of prayer or offering. The background shows thatched-roof buildings and trees under a clear sky.

観光資源の祭、ではない。

利権と出店と売上がたいせつな商業祭ではなく、神に感謝を捧げ、神の御許に還るための祈り、である。

生き物たちと、生きている。

檻に入れられたり、水槽に入れられて、見せ物にしている文化ではない。一緒のフィールドで生きている。

まっすぐに、育っていく。



評価採点しない。競い合わせない。押しつけない。

なぜ、奪い、破壊し、征服するの

この惑星と周波数を合わせて生きているひとが、そんなにも憎いのか。邪魔なのか。独り占めしたいのか。

この星を、
愛してる。

